

岸和田ガラスレンズ産業の文化層序

—— 地場産業の舞台としての大都市圏郊外 ——

藤田 和史

Ⅰ はじめに

地場産業という言葉自体は第二次世界大戦後に生まれ、高度経済成長を経て興隆してきたものである。板倉（1981）によれば、地場産業とは「零細企業集団による広域商品の生産流通体系」とされる。あわせて、地場産業という言葉には、かつては中央資本とは無縁の存在であり、市中銀行からの資金融資でさえ容易ではない零細企業集団という側面もあった。いわば、地場産業とはミゼラブルな存在であると考えられていた。

しかし、高度経済成長が終焉を迎えたころから、ミゼラブルな存在であった地場産業がにわかに注目を集めるようになった。その理由として、従来地域経済を牽引してきた農林水産業の構造的な不振や、大都市圏から誘致した近代工業の波及効果が低調であったことが挙げられている。とくに、オイルショック以降、工場誘致が低調となったことで、地域経済を牽引しうる産業として地場産業が再注目されたのである。

再び注目された地場産業であったが、高度経済成長期を経て、多くの産地が衰退を迎えていた。三全総で地場産業の振興が謳われたものの、衰退傾向をとどめることはできなかった。結果として、現在に至るまで多くの地場産業が失われることになったのである。

さて、地場産業のような地域の産業経済を支える経済活動は、往々にして地域の社会経済や景観に影響を及ぼす。当然ながら、地場産業の消長といった経済的な変動は、地域の変化に大きな影響を及ぼす。このような地域変化を、生態学における植物の遷移理論を援用して論じたものにシークエント・オキュパンス (sequent occupance) という考え方がある (斎藤ほか, 2005)。シークエント・オキュパンスとは、地域遷移のようなものである。斎藤ほか (2005) は、Webb (1931) と Thomas (1931) を引用しながら、アメリカ西部の開拓地の生産活動が、どのように変化してきたかを紹介している¹⁾。

斎藤ほか (2005) は、シークエント・オキュパンスの概念とともに、田中 (1958) が提唱した「文化層序」²⁾ の概念を紹介している。田中は新たな生産活動が現れ始める現象を「曙象」、

1) 遷移論の有効性については、Whittlesey (1929) でも言及されており、斎藤らは Sauer (1925) で提示された「景観の生態学」に通じるものがあると評価している。

2) 田中 (1958) は、川崎市を対象とした総合研究でこの概念を提示している。

それが普及する過程を「初象」、支配的になったことを「顕象」、古い者が消えてゆく寸前の状況を「残象」と呼び、それぞれの活動階梯が地層のように、すなわち「地位層」のように折り重なっているのだとした。

それらを踏まえ、斎藤ほか（2005）は両者の概念を融合した「文化層」・「文化層序」という概念を用いて、長野県下諏訪町の工業的な土地利用の変化を分析している。斎藤らは、ある時代に支配的であった生産活動群を広義の「文化」としてとらえ、それらが土地利用に層として現れると考えた。生産活動群は遷移するものであるから、その変化が層として蓄積され、縞模様を形成する。その状況を「文化層序」と考えている。この考え方は、かつて地域経済を支えた産業にかかわる施設や遺構が、町並みに溶け込んで残存している状態を分析するのに優れているといえる。

以上を踏まえ、本稿では岸和田市でかつて隆盛を極めたガラスレンズ産業を事例に、地場産業の文化層序を分析するとともに、「残象」として現在も創業している企業の現状と課題を立地地域の観点から分析することを目的とする。

上記の目的を達するために、本稿では板倉・北村編著（1980）所収の小口（1980）および小口（1981）をベースに、その他周辺資料を用いて最盛期の状況を把握する。その上で、現状については現在でも操業中のレンズ生産業者においてヒアリングした内容を基に現状と課題を分析する。

II 泉州・岸和田の地場産業

地場産業は、それぞれ個別の出自・発展経路を持っており、その内容・系譜は多岐にわたる。泉州地域においては、近世から綿業地域として知られ、明治時代以降に広幅・小幅織物や泉州タオルの産地として成長してきた。

天正年間（1573～1591年）に南蛮人によって綿花の種子が伝えられ、泉州各地で栽培されるようになった。それと時期を同じくして、農家の副業として「綿繰り」・「手紡」が開始された。手紡による原糸で生産された白木綿は、「和泉木綿」として織布された。しかし、明治に入ると海外から高品質の紡績糸が輸入されるようになり、それらが織布に利用されるようになると、手紡糸の需要は低下していった。それとともに、原綿の需要も減少したため、明治期の終わりには綿花栽培は廃れていった。

それら在来の原料と労働力に依存した原糸・綿布生産に代わったのは近代的な紡績工場である。泉州地域で最初に設けられた近代的な紡績工場は、堺の戎島に官営工場として建設された堺紡績所である（1870年）。堺紡績所は、のちに川崎財閥へと売却され、川崎紡績となった。1887年、川崎紡績所は蒸気機関 20万馬力、120人規模の工場となり、1889年には泉州紡績会社として改組された。これ以外に、1892年に堺紡績会社が湊村（現在の堺市内）に設置された

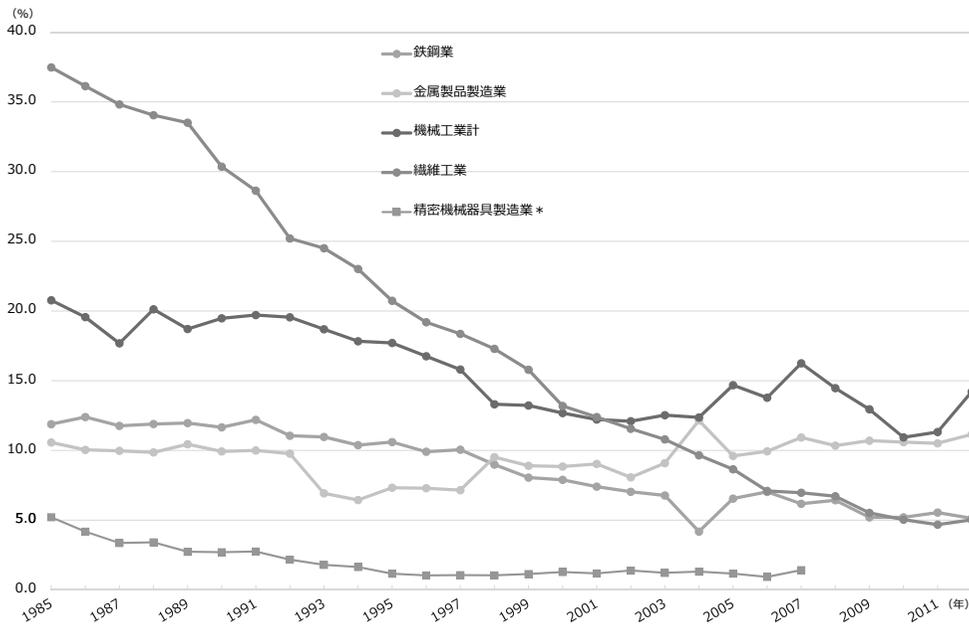


図1. 岸和田市における産業別従業者数比率の推移（1985～2012年）

（工業統計調査各年版から作成）

注1) 従業者数はすべて4人以上。

注2) 機械工業計は、一般機械、電気機械、精密機械、輸送機械およびそれらから改変された産業中分類を含む。

ほか、岸和田町では寺田甚与茂によって岸和田紡績会社が1892年に設置され、1894年1万鍾規模の工場を設けた。岸和田紡績会社は、その後順調に経営規模を伸ばし、1904年泉州紡績会社を合併した。これ以降、堺市から泉北郡周辺の町村に、岸和田町から泉南郡周辺の町村へ、紡績・織布会社が波及・設置されるようになった（青野・尾留川編，1974）³⁾。

さて、岸和田へと目を転じよう。岸和田は岡部氏5万3千石の城下町であり、泉州地域南部の中心都市であった。周辺農村は、先述の通り、和泉木綿の産地として知られており、綿作・手紡・織布などの副業が行われていた。明治時代に入り、外国産の綿花が輸入されるようになると、零細副業から家内工業へと発展した。時期を同じくして、大阪の間屋によって組織化が進み、間屋制資本の下で賃機に携わる業者が増加した⁴⁾。

先に触れた岸和田紡績を設立した寺田家は、岸和田紡績のほか、寺田紡績など関連する紡績・織布企業を設立したほか、鉄道事業への投資や金融業への参画など、地方財閥として泉州地域の産業発展に大きく貢献した。寺田家以外に、各地の中小地主が産業資本家として果たした役割はよく知られている。岸和田市内でも多くの中小地主が、繊維産業へと参入した。岸和田市内では和泉木綿の伝統を受け継いだ小幅織物に携わる業者が多かったようである。これらの繊維産業は、産業革命を経て20世紀後半まで地場産業として確固たる地位を占めた。図1には1980年代半ば以降の岸和田市内の産業別従業者比率の推移を示した。1985年にあっても、岸和

田市内の全従業者 37.5% を繊維産業の従業者が占めていた⁵⁾。このうち、紡績・織布に携わる従業者の比率は 32.1% であるが、1990 年頃を境に急速に低下していく。

代わって、岸和田市の産業の中核を占めるようになったのは、機械金属工業である。岸和田市は、堺・泉北臨海工業地域の南に隣接し、木材コンビナートの整備を契機として、市事業として臨海工業地域整備を実施した。整備された地区には大阪市内等から大阪鉄鋼団地協同組合が進出したほか、出光石油などの化学工業も立地した。また、市内では磯上町に中小企業センターを軸とした工業団地が造成され、市内や近隣地域からの企業が立地した。いわば、それらの企業が岸和田の産業の中核となったといえるのである。

III 岸和田ガラスレンズ産業の成長と隆盛

本章では、小口（1980）および、青野・尾留川編（1974）の記載から、岸和田市で発達したガラスレンズ産業について、その歴史と特徴を概観する。

(1) ガラスレンズ産業のおこり～生野区のレンズ産業～

岸和田のガラスレンズ産業を考える上で、欠くことができない存在が、大阪市生野区田島町（現在の生野区田島一丁目～四丁目）のレンズ産業である。1857 年、東成郡田島村の石田太次郎が江戸で眼鏡の製造技術を習得し、同年 5 月に創業したところから始まる。その後、村内で石田を見習った生産者が増加し、1870 年頃には 4～5、1902 年には 25、1917 年頃には 50～60 まで増加している。それらの生産者の一部が、1907 年に会員数 15 で産業組合を設置し、1917 年には会員数 19 で田島レンズ共同販売組合へと改組している。第二次世界大戦以前では、生産されたレンズの 80% がアジア地域へ輸出されており、国内需要は多くなかった。

第二次世界大戦後、生野区のレンズ産業は最盛期を迎えた。生野区と後述の岸和田を含んだ大阪府下のレンズ産業は、全国シェアの 1/3 を占めるまでになった。しかし、1950 年に日本光学（現、ニコン）、1962 年に保谷硝子（現、HOYA）が参入し、大阪のレンズ産業のシェアが低下するようになった。しかし、これら 2 社の生産量を除くと、1960～70 年代にあっても大阪のレンズ産業は、国内シェアの 95% を占めていた。

1970 年頃の生野区田島町のレンズ産業について記載している青野・尾留川編（1974）では、その特徴として小零細規模の企業集団に基づく分業体制があることを指摘している。大阪眼鏡レンズ工業協同組合に加盟している田島町のレンズ生産企業は 65 社にのぼる。そのうち、従業

-
- ✓ 3) 泉州地域では、このほかに特徴的な繊維工業として、泉佐野市周辺のタオル産業、泉大津市周辺の毛織物工業などがある。なお、泉州地域北部の綿工業地域としての成長の様子は、中島（2001）に詳しい。
 - ✓ 4) 小口（1980）によれば、「豪農を除いた全農の 80% が賃機」であると表現している。
 - 5) 1976 年当時でも全製造業事業所の 48.2% を占め、特に小零細規模事業所が多かった（小口、1981）。

者数 10 人未満の工場が大部分であり、その中でも 4 人未満の企業が 50% を占めている (表 1・図 2)。これらの事業所で熟練労働力としてレンズ生産に携わっていたのは、在日朝鮮・韓国籍の人たちであった。しかし、1960 年に開始された在日朝鮮人帰国事業によって多くの熟練労働力が喪失し、60 年代後半には熟練・若年双方の労働力確保が課題とされるようになっていった。

さて、第二次世界大戦後に田島町で生産されたレンズとは、どのようなものであったのだろうか。眼鏡レンズは多品種少量生産が基本である。その中でも田島町で生産されるレンズは、近視用・老眼用とサングラス用のガラスレンズであった。フレームも、鯖江産地が成長するにつれて伸び悩むようになったものの、近隣の生野区異で生産されていた。区内で生産されたフレームとレンズを組み立てたサングラスは、アメリカを中心に輸出された⁶⁾。

田島町のレンズ産業は、輸出品を中心に成長をしてきたが、大手メーカーの寡占化が進む中で急速に数を減らしていった。図 3 は現在の光学・レンズ生産企業の分布を示しているが、生野区内の企業は軒数を 16 にまで減少している。

表 1. 生野区田島地区の規模別眼鏡レンズ工場数 (1974 年)
(資料: 青野・尾留川編 (1974))

従業者数	工場数
1~3 人	33
4~9 人	25
10~19 人	5
20 人以上	2
計	65

注) 工場数は組合員のみ。



図 2. 生野区田島町の眼鏡レンズ工場の分布
(青野・尾留川編 (1974) 171 ページより転載)

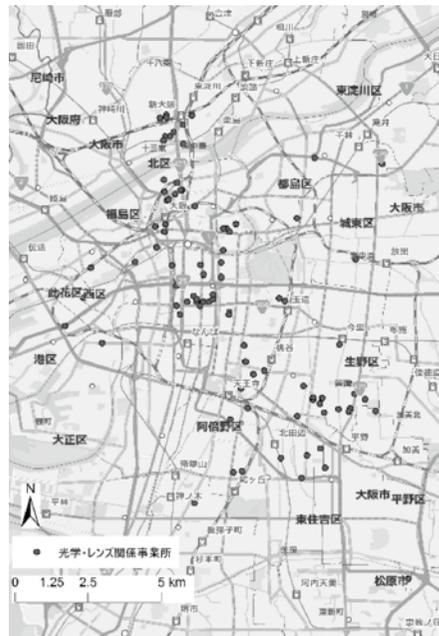


図 3. 大阪府北部における光学・レンズ生産企業の分布 (2014 年)
(インターネットタウンページデータより作成)

(2) 岸和田レンズ産業の発達と最盛期

では、生野区と並んでレンズ生産が盛んだった岸和田のレンズ産業はいつ、どのようにして起こったのであろうか。

岸和田のレンズ産業には、大きく2つの系統があるといわれている。一つはザビエルによってもたらされたガラス鏡に端を発する鬚鏡生産である。18世紀の半ばになると、堺を中心に鬚鏡生産が盛んとなったが、江戸時代の末期には岸和田藩の殖産事業として、日根郡仲ノ庄湊村周辺で鬚鏡生産が行われるようになった。この薄玻璃鏡生産技術を応用して、薄板ガラスの生産が開始されるようになり、後に岸和田市に立地する松浪ガラスが顕微鏡用のカバーガラス・スライドガラスの生産を行うようになった。

いまひとつの系統は、機械を利用した西洋技法によるガラス研磨技術の導入である。明治初期、東京の珠玉製造業者である朝倉松五郎が、機械式研磨技法を採用して珠玉を生産するようになった。1882年頃から、朝倉はこの技法を応用して眼鏡の生産を手がけるようになった。朝倉に師事して機械式研磨技法を学んだ森田（守田とも）某は、後に岸和田市内に乱視用レンズの工場を設立した。その工場に近隣の農村であった下松町から、農家の子弟が修行に入り、1921年頃に独立・創業してレンズ生産をするようになった。これらの工場で作られたレンズは、粗悪品が多く、問屋からの返品が相次いだために、2~3年で倒産した。倒産した工場の跡地に、大阪のレンズ商である加井磯次郎が進出し、買収して工場経営に乗り出した。この工場も1931年に倒産したが、工場で働いていた職長のH氏が自宅の納屋で創業した。H氏の下で働いていたN・O・Uの3氏は、それぞれ天王寺の細井光学、名古屋、東京の同業者へと修行に出て、技術を習得した1934年頃に自宅で創業した。この4氏が岸和田におけるレンズ産業の始祖となったのである。第二次世界大戦後の1955年頃になると、これらの工場で作られた職人たちが独立し、工場数が増加した⁷⁾。独立した企業は、それまで働いていた企業の下請けとして生産に従事していたが、徐々に大阪の問屋からの受注を得ていくようになった。

これらの工場は、いかにして設立できたのであろうか。工場労働だけで創業資金を得ることは困難であった。しかし、彼らの多くが農家の子弟であったことから、農地を売却、もしくは農地を担保とすることで農業協同組合から資金を得ることができた。小口（1980）によれば、レンズで儲けると家屋敷が立派になり、新たに土地を購入する傾向があったということである。

上記のようにして成立した岸和田のレンズ産業であるが、レンズ工場の分布は、下松町を中心に周辺の西ノ内町、土生町へ、そして丘陵部の福田町・包近町などに集中している（図4）。織物工場の分布と比較すると特定の地域に集中していることがわかる。この要因を、明治期の

✓ 6) 青野・尾留川編（1974）によれば、輸出の品別ではサングラスが55%を占め、アメリカへの輸出が51%を占めたという。

7) この独立創業の背景には労働問題があったといわれ、争議化するのを防ぐ目的で独立させたといわれている。

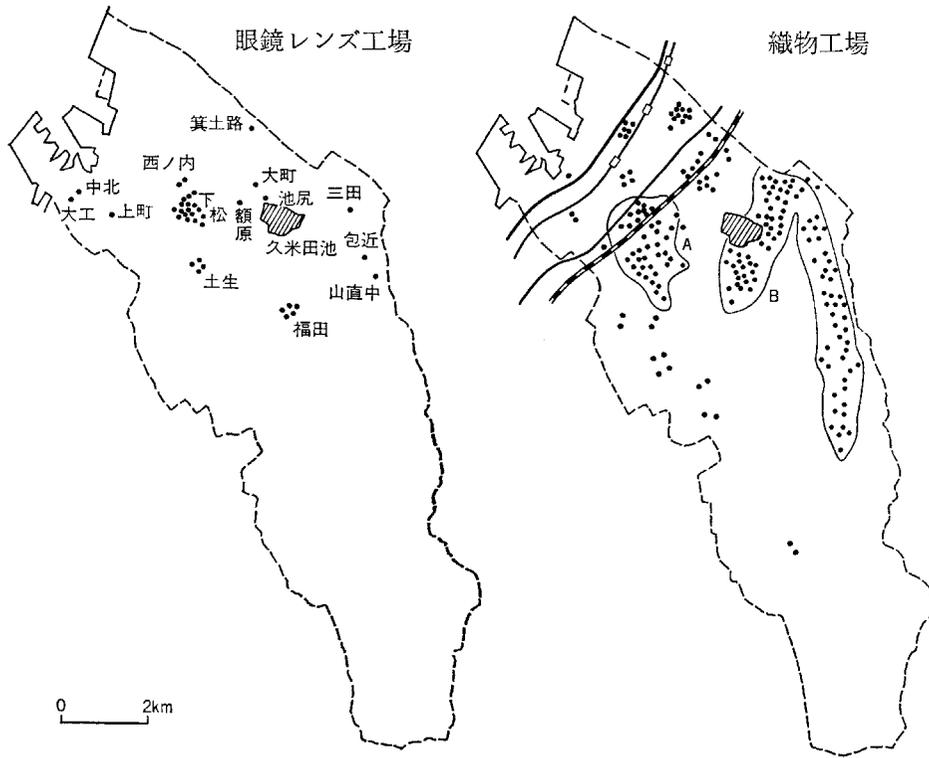


図 4. 岸和田市における眼鏡レンズ工場と織物工場の分布 (1970年代)

(小口 (1980) 194 ページより転載)

土地台帳から分析した小口 (1980) によれば、次のように要約できる。下松町では庄屋の OG 家以外に、村方三役を務める家系として N 家があった。この地区の N 姓は 9 家系あり N 本家と分家 2 家、本家と関係を持たない N 家が 6 軒ある。それぞれは、相互に屋号で呼び合っている (表 2)。この地域は開発年代が古く、土地持ちの地主層であっても十分な農地を持たない家系が存在している。また、宅地が多いことから、農地が宅地に転用され、都市化が進展しつつあることも伺える。この地区では、財産の分割相続が行われており、十分な土地を持たない小零細農層では、相続すると十分な農業経営ができないほど経営耕地が小さくなったり、農地を相続させることができなくなったりしていった。その結果、僅少な耕地・土地を資本に工場経営へと参入せざるを得ない状況に陥った。II でみたように、泉州地域には先行産業として綿業があり、零細地主の多くが織物工場の経営者になるか、さもなければ都市の工場労働者となるかの選択に迫られた。都市で末端の労働者となるより、工場経営者を望んだものにあっては、もうけの幅が大きいレンズ産業が魅力的に映り、織布に代わって導入されたのである。

表 2. 明治初期における下松町の土地所有と農民の階層構成

(資料：小口 (1980))

	A 田 反・畝・歩	B 畑	C 宅地	D 山林原野	A+B	A+B+C+D	農民階層	備考
OG	172.228	6.614	9.928	6.916	178.912	195.826	大農	庄屋
N 本家	20.629	8.123	1.023	5.12	28.822	30.427	中農上層	地主
N 分家 1	4.806	2.820	17.101	3.24	7.626	25.121	小農	
N 分家 2	2.520	8.26	1.512		3.416	4.928	零細農	レンズ機械
N1	13.104	7.1	6.920	6.23	13.814	21.427	中農下層	織物
N2	11.707	1.103	8.01	1.322	12.810	15.003	中農下層	
N3	2.618		3.400		2.618	6.018	零細農	レンズ・織物
N4	1.902		1.317	26	1.902	3.315	零細農	
N5	9.13		3.15	2.15	9.13	1.513	零細農	
N6 (N2 分家)	6.02		20		6.02	6.22	零細農	レンズ

(3) ガラスレンズ産業の衰退

岸和田のレンズ産業が最盛期を迎えたのは、1970年代から80年代初頭である。レンズ工場が集中する下松町の土地利用を示したのが、図5である。かつての農村が都市化する過程で住工混在化していく様子がわかる。岸和田のレンズ産業は、乱視レンズ中心の医療用ガラスレンズに特化し、田島レンズと差別化した。乱視レンズは度数が異なるために、多品種少量生産を余儀なくされる。ゆえに、参入のチャンスが大きかったともいえる。

レンズの基本的な生産工程は、荒ざり・中ざり・最終仕上げの3工程である(図6)。原料となるガラスを、研磨機に砥石とともにセットし、研磨剤をかけながら削っていく。その際、色づけや特殊コーティングなどの加工は外注される。研磨されたレンズは、傷の有無などの検査を経て、梱包され出荷される。1970年代までは板ガラスからガラス玉を加工する工程も行われ、これらの作業がすべて家内工業的に行われていた(写真1・2・3・4)。

しかし、岸和田のレンズ産業には構造的な課題があった。それはレンズ単価の低さである。いわゆる白レンズと呼ばれる無色透明のガラスレンズでは、レンズ一枚の加工単価は8割と高いが、1枚数百円である。大量生産を維持しなければ経営が成り立たないが、一方で生産過剰の危険があった。それを防止するためには、高付加価値化を図る必要があり、解決策として遠近両用レンズが導入された。しかし、遠近両用レンズは加工が難しく、技術を必要とするために、生産ロットは自ずと減少せざるを得なかった。一方で、ガラスレンズ生産自体はニコンとHOYAの2社による寡占化が進行していった。1980年代には両社とも海外に自社大規模工場を展開し、従来あった岸和田など国内産地への下請量を削減した。そこに追い打ちをかけるように、プラスチックレンズの普及が始まった。初期のプラスチックレンズは、傷がつきやすいなどの課題を持っていたが、質が向上する中で加速度的に広まった。1986年には国内のレンズ市場で、ガラスレンズとプラスチックレンズの消費量が逆転し、以降はプラスチックレンズが主流となった。

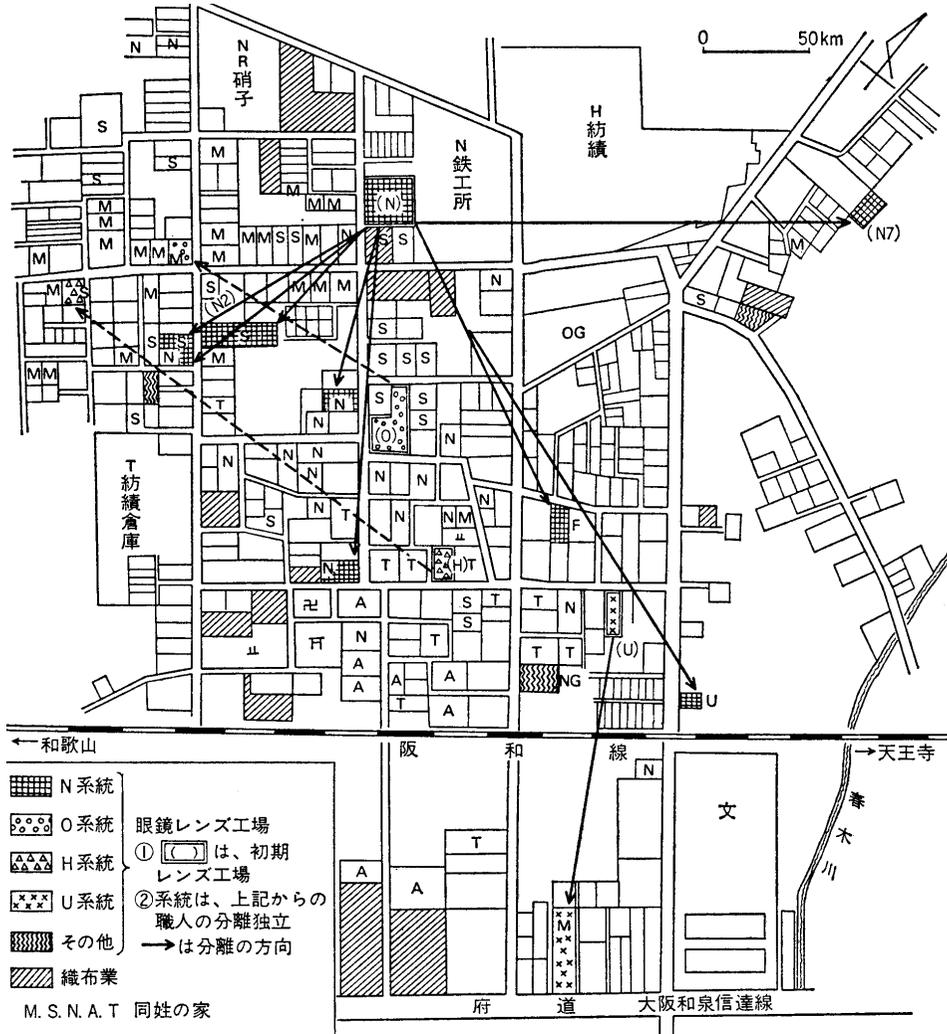


図5. 岸和田市下松町の眼鏡レンズ工場の分布 (1970年代)

(石井・浮田・伊藤編 (1986) 52ページより転載)

小口 (1981) は、岸和田レンズ工業の課題を表3のように示している。家内工業的に営まれてきた岸和田のレンズ産業にあって、もっとも課題となったのはプラスチックレンズへの対応であった。プラスチックレンズの加工は、ガラスレンズのそれと技術・技能が根本的に異なっており、それへの対応が必要となった。具体的には、1台

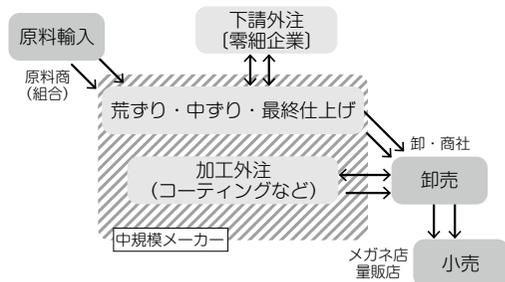


図6. レンズの生産・流過程

(資料:岸和田市中小企業振興会(1983)および聞き取り)



写真1. 板ガラスからレンズ玉を打ち抜く様子 (ニッポンレンズ提供)

板ガラスから小型のプレス機を用いて、研磨するガラスレンズの基となるガラス玉を生産している。後に、ガラス玉は加工済みの原料が供給されるようになった。

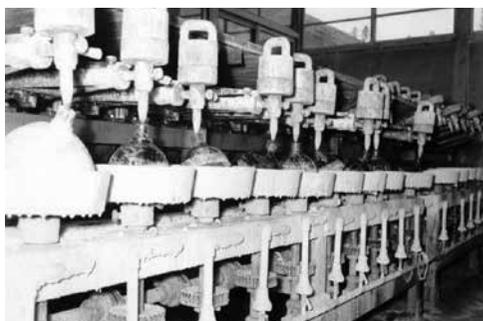


写真2. レンズ研磨の様子 (ニッポンレンズ提供)

ガラス玉を松ヤニを使って研磨皿に貼り付け、上から砥石のついた皿を重ね、研磨皿を回転させながら削る。松ヤニは後に熱湯で溶かして落とす。



写真3. レンズの検査工程 (ニッポンレンズ提供)

顕微鏡を用いて入念に検査している。



写真4. 梱包・出荷工程 (ニッポンレンズ提供)

検査が済んだレンズは梱包されて出荷される。

表3. 岸和田レンズ産業の課題と展望 (資料：小口 (1981))

レンズ産業の課題	今後の展望
輸入品の増加 生産過剰・価格低下 既製の低価格老眼鏡・サングラスの増加 原料価格高騰 プラスチックレンズへの対応 大手メーカーの参入 PR・ブランディング	合理化・協業化 原料輸入のコストカット ブランド化の推進 レンズの品質の均質化 軽量化・新素材開発 (ガラスレンズ) 単機能・加工業者→製造卸・小売までの一貫経営

1億円程度する専用の加工機が必要となり、従来の設備では加工できなかった。ヒアリングしたN社によれば、その設備投資負担が大きく、廃業を決意した同業者が多かったという。図1をみると、1980年代後半から90年代にかけて、光学機器の従業者が急速に減少していることがわかる。

1990年代に入ると、プラスチックレンズが主流となり、大手メーカーの寡占化がいつそう進んだ。その反面、ガラスレンズの需要は遠近両用レンズなど一部に限られ、急速に縮小していった。大規模な設備投資を図ってプラスチックレンズ生産へと転換した企業もあるが、経営体力の大きな少数に限られた。経営体力の小さい事業所は、遠近両用などの特殊レンズや特注品のガラスレンズ生産へと移行した。すなわち、産地内企業の棲み分けが進んだのである。

しかし、2000年代になってから普及した低価格眼鏡チェーンが追い打ちをかけた。低価格の眼鏡チェーンでは、高価格な国内産レンズを使用せず、国内大手メーカーの海外産レンズを利用した。低価格路線へと消費者の購買行動が移った現在、眼鏡の購入はチェーン店へとシフトしており、国産のレンズはプラスチックレンズであっても縮小傾向に陥っているといえよう。

IV 「残象」としてのレンズ産業～むすびにかえて～

本稿では岸和田市でかつて隆盛を極めたガラスレンズ産業を事例に、地場産業の文化層序を記述してきた。最後に、「残象」として現在も創業している企業の現状と課題を立地地域の観点から分析しておきたい。

III-(3)の最後でも述べたように、岸和田のレンズ産業はもはや衰退産地の一つとして数えられるだろう。その立地をみても、10社にも満たないところまで数を減らしている(図7)。大阪

↓左側の地図の一部を抜粋(拡大)したもの



図7. 岸和田市における光学・レンズ生産企業の分布(2014年)

(インターネットホームページデータより作成)

府下のレンズ加工業者で組織されていた同業組合も、2011年に解散している。一般に、家業を廃業することは相当な決断を要することであるが、岸和田レンズ工業ではなぜ廃業の決断が素早かったのだろうか。小口（1981）は大都市近郊に立地していることを理由に掲げている。すなわち、近隣の大都市に出れば、多様な就業先が提供されており、無理をしてまで自営を継続する必要がないという考え方である。これは、ガラスレンズ産業が普及した観点とは真逆の観点でもある。実際、2013年までレンズ工場を営んでいたN氏も、廃業を決断し、現在は同業他社の工場に勤務している。彼の発言によれば、負債を抱えてまで家業を継続するならば、廃業した方が身軽であるとのことであった。

一方で、現在でも遠近両用レンズに特化しつつガラスレンズの生産を継続している企業もある。N3社ではかつてと同様の設備・方法で、自宅兼工場で遠近両用のガラスレンズを生産している。生産量は少ないものの、付加価値率が高い商品を選択したことで、経営自体は安定している（写真5・6・7）。しかし、生産に携わる熟練技能者の高齢化は著しい。ガラスレンズの研磨は長年の経験に培われた勘がものをいう。その反面、プラスチックレンズは標準化が進み、加工機にデータを入力すれば、意図したものと同等の加工がなされる。加工技能が継承されなければ、ガラスレンズの生産自体が消滅するものとなろう。



写真5. 遠近両用レンズの加工プロセス（2014年撮影）

遠近両用レンズは、異なる屈折率のガラスを圧着させてから研磨していく。フレーム右側のものが研磨済みのレンズ。



写真6. 研磨皿と砥石がついた皿（2014年撮影）

写真中央上段が砥石がついた皿、その下段がそれと組み合わせる研磨皿である。研磨皿はサイズによって組み合わせ方等が代わる。



写真7. 研磨皿に松ヤニを使ってレンズを装着している様子（2014年撮影）

熱した松ヤニを利用して研磨するレンズを貼り付けている。

現在でも下松町周辺では、レンズ産業が華やかであった頃の様子をうかがうことができるが、一方で更新が進んでいる区画も少なくない。その多くは、工場を伴った住宅から、一般的な住宅や集合住宅へと転換されている。都市化の一過程として発現する住工混在は、その産業の衰退をもってクリアランスされているのである。一部残るレンズ生産業者が、往時の残象としてそこにあるといえよう。

付記

本稿を作成するにあたって、JSPS 科学研究費若手 (B) (課題番号: 26870372) の一部を利用した。

参考文献

- 青野壽郎・尾留川正平編 1974. 『日本地誌 15 大阪府・和歌山県』二宮書店.
- 石井素介・浮田典良・伊藤喜栄編 1986. 『図説 日本の地域構造』大明堂.
- 小口悦子 1980. 社会構造と地場産業. 板倉勝高・北村嘉行編著『地場産業の地域』191-200. 大明堂.
- 小口悦子 1981. 続・地場産業の町—岸和田の眼鏡レンズ工業—. 地理: 27-10. 87-93.
- 岸和田市中小企業振興会編 1983. 『地場産業の振興にむけて 岸和田市におけるレンズ工業調査報告書』岸和田市中小企業振興会.
- 斎藤 功・呉羽正昭・藤田和史 2005. 下諏訪における工業的土地利用の文化層序. 地域研究年報 27: 1-18.
- 田中啓爾編 (1958): 『地理的総合研究—川崎市と東京江東区—』古今書院.
- 中島 茂 2001. 『綿工業地域の形成』大明堂.
- Sauer, C. O. (1925): The morphology of landscape. University of California Publications in Geography, 2, 15-54.
- Thomas, L. F. (1931): The Sequence of Areal Occupance in a Section of St. Louis, Missouri. *Annals of Association of American Geographers*, 21, 75-90.
- Webb, P. (1931) The Great Plains. Ginn, Boston.
- Whittlesey, D. (1929): Sequent Occupance. *Annals of Association of American Geographers*, 19, 162-165.

Cultural Strata of Glass-Lens Industry in Kishiwada City: A Study of the Suburb as a Hub for Localized Industries

Kazufumi FUJITA

Abstract

This study aimed to analyze the cultural strata of Kishiwada's glass-lens industry as an example of a localized industry. We analyzed the conditions and problems of operational factories in terms of their location and environment.

Although Kishiwada's Shimomatsu district has undergone considerable land redevelopment, we could still learn about the prosperous history of the glass-lens industry. There used to be numerous buildings housing factories, which have now been transformed into simple houses or apartment houses. The integrated industrial-residential area, which appeared as a result of urbanization, is seeing a transformation because of the decline in the dominant industry. The glass-lens industry in Kishiwada is no longer considered declined industrial area.